

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	0991300096		
法人名	株式会社 TAKK		
事業所名	認知症高齢者グループホーム さくらハウス		
所在地	那須塩原市高林1931番1		
自己評価作成日	平成26年9月18日	評価結果市町村受理日	平成26年11月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	平成26年10月30日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

家庭的な雰囲気の中でのおんびり過ごして頂けるように、時間にとらわれず、ご自分のペースで生活できるよう、また、ご自分の能力を発揮できる機会をつくり、得意なことや、やれる行為を継続的におこなえるよう支援しています。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

グループホーム独自の理念「笑顔があふれる暮らし」を支えるために、職員は意識して穏やかに声をかけ笑顔で対応することで入居者の笑顔を引き出し、職員同士で話す時にも入居者の前で声を荒らげたりしないことを徹底したことで、入居者の笑顔と穏やかな生活を作っている。開設から3年が過ぎた今、職員が落ち着き、入居者も穏やかに過ごしている様子が窺えた。事業所付近は人家が少なく、近所とのつきあいが困難であるが、様々なボランティアの訪問があり、地域の高林小学校4年生との交流は学校の行事として定着し、子どもたちと過ごす時間は入居者の楽しみになっている。今年から「ボランティアサマースクール」の中学生を受け入れ、子どもたちの認知症とグループホームについての理解を促している。事業所では、遠く離れた家族に入居者が手紙を出すことを手助けして親子関係をつなぐことや、帰れない自宅であっても、せめて自宅周辺をドライブすることで、入居者の馴染みの場所や親しい人との関係を維持し続ける支援をしている。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	昨年、グループホーム独自の理念「笑顔があふれる暮らし」を作り、入居者は勿論、私達職員自身も笑顔で過ごせるように、職員間での共有を図り実践に活かしている。	グループホーム独自の理念「笑顔があふれる暮らし」を支えるためには、職員は意識して穏やかに声をかけ笑顔で対応することで入居者の笑顔を引き出せたと自負している。また、別の職員は職員同士で話す時にも入居者の前で声を荒らげたりしないことを徹底したことも、入居者の笑顔と穏やかな生活に結びつけられたと実感している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の小学校との交流会や、ボランティアの慰問、蕎麦打ち等を実施して恒例行事になっている。	事業所付近は人家が少なく、近所とのつきあいが困難であるが、レクリエーション協会、フラダンスや蕎麦打ちのボランティア、地域の高林小学校4年生の訪問などで外部の人との交流を図っている。小学生の訪問は学校の行事として定着し、子どもたちと過ごす時間は入居者の楽しみになっている。今年からボランティアサマースクールの中学生を受け入れ、認知症とグループホームの理解につなげている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小学校との交流会や、今年度初めて受け入れた中高生ボランティアサマーの中で、認知症を有していても会話を楽しめたり昔の知恵を教わることができ、尊敬する大先輩であることを伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族の出席が少ないままではあるが、事業所だよりで会議内容を知らせ、少しでも興味や関心を持ってもらえるように取り組んでいる。また、会議に出席して頂いている民生委員や地域包括の方へ、事業所の実施状況等の報告を行い要望や意見を伺い職員教育やサービス向上に努めている。	運営推進会議のメンバーに地域の民生委員が全員加わっている状態は継続されているが、民生委員の交代があったのでグループホームを理解してもらう工夫も必要となっている。運営推進会議の中で、ヒヤリハット事例の報告を行い、ヒヤリハット事例の収集が多いほど事故を防ぐことにつながることを説明し、事故防止の施設の取り組みへの理解を深めてもらっている。	開設当初の運営推進会議のメンバーであった地域の民生委員等の交代もあり、新メンバーにグループホームへの理解を得ることが必要となっているが、今後も良き理解者となって頂けるように、運営委員会での働き掛けを丁寧に行うことを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村との連携は図れている。事故等や事業所内のトラブルに関しても速やかに報告し指示を仰いでいる。	昨年は、事業所だけでは対応できない出来事や事故等が起きた時など、市の担当者から対応の仕方などのアドバイスや指導を受けていた。今年度は、市の保護係や保健師と協議して、市と協力する形で若年性認知症の人を受け入れている。	受け入れた若年性認知症の人は現在グループホームの生活に溶け込んでいる様子が見うけられるが、今後様々な課題が出てくるのが予想されるので、市の関係課との連携を更に深めることが求められる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束することは無いが、言葉での抑制はあり、職員が手薄になる時間帯には「ちょっと待ってて。」等の制止をしてしまう。スピーチロックを減らす為に、日勤の時間帯を変更し職員が手薄になる時間帯を補う工夫をしている。	身体拘束する事は無いが、夕方は心寂しく入居者の不穏となりやすい時間帯であり、職員配置が一人になるため、どうしても行動を抑制する言葉かけがみられた。その課題を解決するため、職員の配置を見直し、夕方の時間帯も二人体制とした。そのことによって、一人が見守り、一人が直ぐに対応できるようになり、言葉による抑制をしないでゆったりと対応ができるようになった。入居者も直ぐに対応してもらえることが分かると必要以上にトイレなどと言わなくなり、落ち着いて過ごすようになっていく。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待マニュアルを参考に定期的な勉強会の中で取り上げている。入居者の全身状態の観察を行いあざ等の確認と、精神状態の変化を見過ごさないよう職員間の連携を図っている。職員の精神的な変化にも気づけるように個別面談等も行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	運営推進会議の議題に取り上げたり、勉強会の中で学ぶ機会を設けている。今後も継続的に学習していく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明を行い不安等への対応も行っている。入居してから新たに出てきた疑問点に関してもその都度対応出来るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や意見箱を利用しご家族の意見を伺っているが、会議への参加率が低く、運営に関する意見を伺うことができない。家族へのアンケート等の実施も検討しているが実際に行えていない。	運営推進会議への家族の参加は少なく、運営に関する意見を聞く機会は面会時となるが、運営に関する意見が聞けることは希である。管理者は、家族が入居者の変化をどう見ているのかを聞き、その中から運営に反映できることがないか模索している。昨年、ひとり暮らしの入居者を本人の意思を尊重し、准看護師2名と主治医の往診で対応できる体制をつくり、グループホームで看取りを行った。しかし、正看護師がいないため、看取りは基本的に行わない方針で運営をしている。	併設の小規模多機能型施設では利用者・家族へのアンケート調査を行い意見の収集を行っている。グループホームの利用者家族に対しても同様の取り組みを考えているので、今後実施することを期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度行なっている勉強会に管理者も出席し職員との意見交換を行っている。ケアに関することや業務に関する話を話し合える場となっている。	毎月の勉強会では、認知症の理解を深めるための勉強を続けている。認知症の行動障害を理解することで、認知症の人の行動には必ず理由があることなどを学び、入居者への対応を改善している。例えば、午前中は入居者が比較的落ち着いていて、夕方は不穏となることが多いことを学んだことから、職員の提案を反映して夕方の職員体制を見直している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個別面談の機会を設け意向の確認をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修受講に関して前向きに検討し、働きながら職員同士での学びの機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同法人の別事業所との交流を持てるようにしている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人の好みや不快に思うことを確認し過ごしやすい工夫を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の困り事や不安に関して傾聴し、要望に関してもできる限り対応できるように心がけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人とご家族のニーズを見極め対応できるように努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者それぞれの体力や能力の差はあるが、その方ができることは継続できるよう、集団生活では無く共同生活を送れるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族が来所時には日頃の様子を報告し、毎月の行事等での様子をスナップ写真と共に文書にして送付しご本人の状況を把握していただけるようにしている。また、遠方のご家族へ、1人では難しくなってしまった手紙の文章も職員が言葉を引き出すことで想いを伝えることができています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	併設している小規模多機能施設への行き来もでき、以前の知り合いとも交流ができるようにしている。また、ご家族との外出や、居室での談話もできるようにしている。	事業所では、遠く離れた家族に入居者が手紙を出すことを手助けし、親子関係をつなぐ支援をしている。また、家族が通院介助を行うことで家族にも役割を担ってもらい共に入居者を支える関係を作っている。併設する小規模多機能型施設に来ている知人等と交流することで馴染みの人になかなか会いに行けない状況を補っている。職員は、帰れない自宅であっても、せめて自宅周辺をドライブすることで入居者の馴染みの場所に出かける支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事前のテーブル拭きの担当、食器洗い、食器拭きの担当等を決めそれぞれの役割を持って過ごさせている。親子関係の様な入居者も居て、隣に座って息子が母を優しく見守っているような光景も見られている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院時や他施設への入居当初はご家族の不安もあるため随時相談等の対応を行う。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自分で出来ることは継続できるように見守りや声かけで支援している。身体状況に問題が無く動ける方や座って手作業しか出来ない方等、それぞれのペースですすめている。塗り絵が好きで没頭して作業している方へ、散歩を促し気分転換を図り、押し花用の花の採取を手伝うなどの支援もしている。	「天気が良いので外に出たい」と思っても、言葉で表現することができない入居者もいるので、職員はそれを察して支援する努力をしている。ホールのモップ掛け、食器洗い、洗濯物たたみなど、職員は入居者ができることを把握し、役に立つことの喜びを感じてもらえるような状況を作っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族やご本人から、生活歴や今までの環境、趣味等の情報を得ている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別ケアを中心に、一人ひとりの一日の流れを把握し、身体状況及び精神状況の変化にも対応できるよう現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者がケアプランを作成し、担当毎に個別介護計画を作成しているが、意見交換がスムーズに行えず、モニタリングも職員全員で実施できていない。	全職員がアセスメントできるように勉強会で取り組んでいるところである。職員会議の中では、自分だけが知っている情報に留めるのではなく、全職員に知ってもらうためにケアに必要な情報を出し合い話し合っている。ケアプランはケアマネージャーの資格をもつ管理者の下、計画作成担当者が立てている。日常のケアで気が付いた内容は申し送りノートを活用して計画作成の参考情報にしている。モニタリングは管理者が行っており、全職員での取り組みは今後の課題である。	全職員がアセスメントできるように取り組んでいるが、アセスメントの大切な部分である利用者の思いの酌み取りかた、ニーズの導き方を習得して、より良いケアプラン作成に結びつけられることを期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や経過に関する個別記録への記入はできていて、職員間での情報の共有も申し送りノートを活用し実施できている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズや状態の変化に伴い、他施設への検討や、医療との連携も図れるよう、往診の依頼等も行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の小学校との交流会や、ボランティアの慰問、蕎麦打ち等を実施し、消防等の指導を受け応急処置やAEDの使用法の講習を受け安全な暮らしの継続に繋げている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族の協力も得ながらかかりつけ医への受診を行っている。細かい情報が必要な場合には、日々のバイタル状況や排泄・水分摂取状況等を書き込み主治医へ渡してもらっている。また、高齢のため通院が難しくなってしまった方には往診の依頼もしている。	かかりつけ医への受診は基本的に家族が付き添い行っている。受診に必要な情報については状態の説明を記入したメモを家族に渡し、家族からは受診報告を受け、申し送りノートや業務日誌に記入して職員で共有している。車椅子や高齢で通院困難な入居者には、かかりつけ医でもある法人の関連医院の医師が往診で対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師も介護職として共に業務に業務に従事している中で、医療的な支援の必要性について相談し適切な判断を下している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院関係者との情報交換を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りに関してはまだ完璧に行える状況ではないことを伝えている。ご家族の意向を確認し、医療的な処置が必要な場合には病院での治療をすすめている。急変時にはご家族へ連絡し要望を確認する。	身寄りが高齢の弟夫婦だけの入居者の希望で、職員、かかりつけ医の協力で看取りを行った事例がある。看取り後、終末期の対応について職員の意識も変化してきているが、完全に看取りが行える体制ではなく、現段階では病院等を選択せざるを得ない状態である。そのため、職員は研修や話し合いを重ねて家族の意向に添った終末期のあり方を探っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の連絡体制はできているが、全ての職員が応急手当や初期対応を出来る体制では無い。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防訓練を実施し夜間も想定した訓練を行っているが、入居者の動きや状況を予測し、どの入居者なら見守りを頼めるか、どの入居者から避難させるか等相談し、併設の小規模職員へもGHの入居者の状態や居室と名前の把握をしてもらう等促している。	夜間想定訓練を含め年2回消防訓練をしている。前回のグループホームだけの訓練は、入居者が落ち着いている時間帯であったため誘導もスムーズに行われた。消防署からは、担当者の声が小さいとの指摘があったただ、グループホーム独自に反省点を挙げ、職員間で話し合いを行い今後の訓練に活かしたいと考えている。また、併設の小規模多機能の職員の協力も具体的に検討している。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ご本人が不快な思いをしないで過ごせるように心がけている。排泄への声かけにも気をつけ、排泄物も直接目に触れないようにエコバック等に入れて処理する等の工夫をしている。	職員は、入居者の気持ちの変化や顔の表情、話し方で一人ひとりの思いを酌み取っている。また、思い込みや勘違いに気を付け職員間で情報を共有した上で、声かけや話しをする様にしている。トイレには行きたいときに直ぐに行ける排泄支援をしている。笑顔での接し方や見守りで入居者が話しやすい環境作りを心がけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人の思いや希望を表現しやすいような言葉かけや態度で接するように心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にし、起床時間や就寝時間、排泄の決まりも無く過ごして頂いているが、制止の効かない入居者が優先になり、待つ頂く方も居て職員側の都合を優先してしまうこともある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みの服を選んで着たり、2か月に1度は施設に来てくれる理美容の方に散髪してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食材会社から福祉食の食材が届き職員が調理している。入居者と一緒に調理はできていないが、一緒に食事し、配膳や後片付けを行っている。行事の時にはノンアルコールビールやお寿司を食べることもある。	食材会社のメニューにより献立を決め、届いた食材で職員が調理し、ごはん、味噌汁、おやつも手作りである。食前に献立の説明があり職員の声かけ見守りの中入居者は自分のペースで食事をしている。テーブル拭きや食器洗い、食器拭きなど出来る事を入居者が積極的に手伝っている姿があった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1人ひとりに適した量を配膳し、栄養バランスも考慮した献立になっている。摂取量や水分量のチェックも行い管理している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	拒否や抵抗がある場合は無理強いせず、出来る限り毎食後に口腔ケアを行い、義歯の状態や口腔内の状況を確認している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の訴えがあった時には何度でも対応し、トイレでの排泄を促している。	リハビリパンツやパッド使用の人がほとんどで、意思表示を見極めて誘導を行い、トイレでの排泄を支援している。不安から頻繁に「トイレ」と言っていた入居者が、直ぐに対応することによっていつでも対応してもらえると安心し落ち着いたという変化もあった。夜間も入居者の気持ちに添ってトイレ対応を適切に行い、排泄の自立支援を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取や適度な運動、必要時には便秘薬を使用し排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	午後に入浴の時間を設け、1人の職員が最初から最後まで一通り行い、その方に合った時間配分で支援している。今後は、状況に合わせて、夜間の入浴も検討していく。	1日4、5人の入居者が午後に1対1の職員対応で個浴槽で入浴している。個浴槽は浴槽壁の高低が可動調節でき、少し足を上げただけで安全・安心な入浴が可能になっている。ゆっくりした気分で入浴できるよう配慮しており、申し送りノートや業務日誌に記された注意事項に従い、洗身や薬の塗布の対応をしている。ゆず湯など季節湯も実施している。脱衣所は床暖房が整備され、入浴後は職員と一緒に選んだ衣服に着替えている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	部屋の温度や明るさの調整を行い、いつでも自分の居室でのんびり過ごせるように心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬事情報を確認し、看護師の指導の下全職員が把握に努めている。服薬の準備も全職員が責任を持ち準備し、症状の変化等への観察も行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	興味のあるレクや入居者だけで行えるランプ(ババ抜き)を楽しめたり、プチトマトを収穫しおやつに食べる等、その時々で楽しめることを提供している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご家族が頻繁にドライブや外食・外泊に連れ出してくれる入居者もいる。月に1度は施設としての外出計画を立てているが、それぞれの希望に沿った外出はできていない。	季節ごとの花見(さくら、あじさい、紅葉)に行くほか、月に一度、外出支援として入居者2、3人ずつ外食や100円ショップでの買物等を楽しんでいる。家族と2ヶ月に1回外出、外泊をする人もいる。天気の良い日には敷地内を散歩をすることが多い。今後、入居者の希望に合わせた外出の機会を作って行きたいと考えている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は施設で行っている。本人には現金は渡していない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ハガキや手紙を書ける方には家族への手紙をすすめている。住所の記入や切手を張る手伝いは行っている。電話も希望時には対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用のホールからはプランターに植えられた花々を眺められるようになっている。テーブルや席の配置にも配慮している。	食堂を兼ねた居間には高い天窓があり、太い木の梁や障子によって明るくぬくもりのある空間になっている。システムキッチンの棚は白で統一され、落ちついた雰囲気が感じられる。居間のテーブルを囲んでぬい絵をしたり歌をうたったり、居間に隣接する和室では、洗濯ものをたたんだり、ソファでテレビや新聞を見たりと入居者が各々自分の好きな様に過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自由に席を移動できるので、数人で集まりトランプやゲームを楽しむ事もでき、和室に置いてあるソファに座りテレビを楽しむ事もできる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、以前使用していた家具や使い慣れている物を持参して欲しいと話している。家族の写真を飾ったり、好きな本や人形等を持ってきている方も居る。	各部屋のドアの真ん中に入居者の名前が貼ってある。室内には洗面台が備え付けられ、ナースコールの近くにベッドが置かれている。各自ダンスや衣装ケースを揃え、ぬいぐるみを飾ったり壁に写真や自分で色を塗ったカレンダーが掛けてある部屋もある。居室の整理整頓や掃除を入居者と職員が一緒に行い、家族には使い慣れた物を持ちこんでもらうよう依頼して、入居者それぞれが居心地良く暮らせる部屋づくりをしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの表示や居室のドアにはネームをつけて分かりやすくしている。		